

輪ギクの周年安定出荷及び高品質生産への支援

■ J A香川県飯南地区花卉部会 ■

(中讃農業改良普及センター 竹内小百合)

●対象の概要

J A香川県飯南地区花卉部会(部会員数 17名)は、施設の白輪ギクを中心に約9ha栽培し、主に京阪神、香川県内に出荷している。部会では生産販売体制を強化するため、J A飯南集荷場にキクの自動結束付自動選別機や予冷庫などを導入し、持ち込みによる共同選花部会「香川ベスト」を立ち上げ、出荷調整作業の軽減化を図るとともに高い品質に揃えることによるブランド化に繋げてきた。

しかし、近年、高齢化に伴い産地の生産面積の縮小や販売単価の下落、種苗費、燃料費など生産コストの高騰により経営環境の悪化が続いている。そのような現状を打開するため、部会の中心的な担い手が、生産面積の拡大と高品質なキクの周年安定出荷を強化し、予約相対取引による経営の安定化を目指している。

●課題を取り上げた理由

産地では輪ギクの周年生産が定着し、市場や顧客の信頼を得てブランド化が進む一方で、顧客から物日への出荷量増加の要望が強まっている。規模拡大によってさらに安定した周年出荷を実現することで予約相対取引を充実させ、近年顕著になってきている時期別単価差の平準化を図っている。このような取組は、経営の安定化に繋がることから、産地の中心メンバーである30~40代担い手の規模拡大意欲は高い。産地では、キクの需要が年々減少し産地間競争が激しくなる中、少ない労働力でも効率的で酷暑期や厳寒期の温度条件・日照条件による開花遅延等を回避できる、高品質・省力・標準化生産を行なえる高性能施設の導入が望まれている。また、産地の規模拡大に伴い、特に物日需要の要望に添えていくには、J A飯南集荷場の現状の施設での受け入れ能力を超える出荷日が予想され、J A飯南集荷場への予冷庫の導入が必要であった。

一方、平成26年から28年にかけて管内でウイルスによるえそ病、茎えそ病などの病害が発生し、出荷量の低下がみられていたほか、12月~4月出荷作型の主力品種「神馬」の花のボリュームアップや2L率の向上など品質面での課題があった。

これらの課題を解決するため、県単事業を活用し、産地への高性能施設の設置とJ A飯南集荷場への予冷庫の導入支援を行うとともに、高品質生産に向けた技術指導により、輪ギク物日需要に十分対応できる体制づくりに取り組む必要があった。これにより、J A飯南地区共同選花「香川ベスト」のブランド力の向上と産地強化による農業経営の安定化を目指した。

●普及活動の経過

1 規模拡大支援と集出荷体制の強化

栽培施設の拡大を希望する若い担い手や新規就農者に対して、平成28年度~31年度県単事業を活用した施設の新設に向けて生産計画も含めた検討及び個別の相談・指導を関係機関と連携し行った。

合わせて、J A飯南集荷場への新たな予冷庫の導入も支援し、生産規模拡大に伴う輪ギク物日需要に対応できる体制づくりを目指し、産地の基盤強化を図った。

2 周年安定生産と高品質生産の支援

1) えそ病等ウイルス病対策

キクのえそ病、茎えそ病は、主にアザミウマ類が媒介することで罹病する。そこで、アザミウマ類の発生状況を的確に把握するため、管内で多発した2箇所において、粘着トラップを用いて定期的な発生調査を行い、生産者等へ情報提供を行うとともに、薬剤によるローテーション防除やハウス周辺およびハウス内雑草の除去の徹底、ハウス開口部のネット設置等について巡回指導や講習会を行った。

2) 主力品種「神馬」の花芽検鏡による高品質生

産への支援

12月～4月出荷作型における白輪ギクの主力品種である「神馬」は、花のボリューム不足になりやすく、その対策として再電照を行うことで、舌状花を増やし露芯花の発生を防止している。再電照は適期に行うことが重要であるため、各生産者、作型ごとに花芽検鏡を行い、再電照のタイミングについて指導することにより2L率の向上を図った。

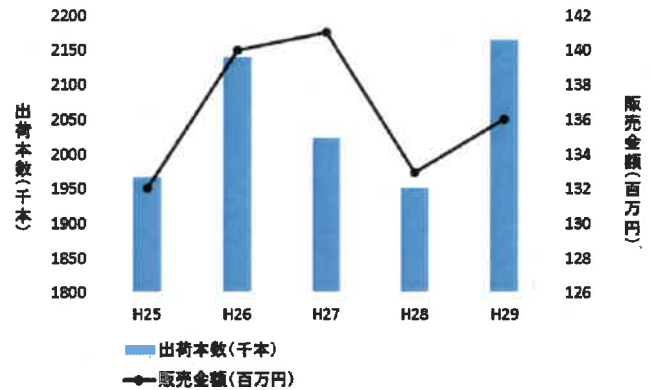


新設ハウスでの栽培状況

●普及活動の成果

1 規模拡大支援と集出荷体制の強化

県単事業「かがわ園芸産地活性化基盤整備事業」を活用し、平成28年度にはJA飯南集荷場に集出荷調整貯蔵機械施設を導入し、既存の予冷库2基に加え3基に増設した。また、高性能施設の導入については、生産者2名が28aを増反し、翌年の平成29年度に1名の生産者が17.9aの規模拡大を行った。これにより、「香川ベスト」による生産量、販売額が向上しただけでなく、新設ハウスの増加により、酷暑期や厳寒期の温度条件・日照条件による開花遅延等を回避でき、全体的に高品質な生産物が効率的に生産できるようになった。また、定時・定質での安定出荷ができるようになり、契約販売本数の向上につながった（H28年46万本→H29年49万本）。



図ー1 「香川ベスト」の出荷本数および販売金額の推移

2 周年安定生産と高品質生産の支援

平成26年から28年にかけて散見されたウイルス病については、防除対策の指導を徹底したことにより、平成29年以降管内での発生は確認されず、生産物のロスが減少して生産性が向上した。また、冬作の「神馬」に関しては、品質が向上し、年間での白輪ギク出荷物の2L率が向上した（H28年31%→H29年36%）。

●今後の普及活動の課題

高性能施設の導入や高品質化への取組により、品質低下、開花遅延を防ぐことができ、生産性は向上した。しかし、既存施設では生育のバラつきや立枯病など出荷ロスが目立ってきており、天地返しやケイントップなど有機物の投入、肥培管理など栽培の見直しが必要となっている。また、「香川ベスト」の出荷量・2L率は向上したが、葬儀・仏花需要の低迷により平均単価が下落し、販売金額は思ったより伸びておらず、物日への確実な対応やさらには花育によるお墓参りの啓蒙、動物園の鎮魂祭など新たな需要の創出への取り組みも必要な時代となってきた。さらに、物流業界の人手不足により、市場ではこれまでの集荷業務に対する危機感がある。ロスなく確実な取引ができる予約相対取引の重要性が高まる中、産地では、今後も品質および周年生産の安定化を図り、更なる顧客ニーズへの対応、販売促進活動の強化や部会内での情報共有が重要である。